県指定　有形文化財

「玩具コレクション」のこけし

菊野智美
（本館　資料調査編集員）

はじめに

平成一〇年、当館は鹿児島市にお住まいだった故川邊正巳氏（一九〇六～一九九七）のご遺族から、「玩具コレクション」の寄贈を受けた。

川邊氏は鹿児島市に生まれ、九州帝国大学二年生だった昭和五（一九三〇）年、弟が買ってきた大阪土産がきっかけで、玩具を収集するようになった。大阪住吉神社の「裸雛」や「力士人形」、「種貸しさん」などで、それらのなんともユニークな形やいわれに心ひかれた。

また、ちょうどその頃、武井武雄著『日本郷土玩具　東の部・西の部』（地平社書房、一九三〇）が出版され、日本の郷土玩具の種類の多さに驚くと同時に、それらが人々の暮らしに密着していることに感動した。

この時から鹿児島はもとより、全国各地の郷土玩具を収集するようになり、また、戦前には約一ヶ月かけて中国東北部（当時の満州）に旅行し、一〇〇〇点ほどの玩具を持ち帰った。

こうして、土人形、ダルマ、こけし、鳩笛、張子人形などさまざまな玩具を収集したが、第二次世界大戦以降は玩具の原料も色彩も変わってしまい、魅力を感じなくなったとしてほとんど収集しなくなった。

収集した玩具は通称「川邊コレクション」と呼ばれている。中には現在廃絶して入手不可能となったものも多数含まれており、玩具に関する書籍類も相当数にのぼっている。このため、昭和二九年五月には鹿児島県の「県指定　有形文化財（工芸品）」の指定を受けた。

コレクションの数は約五〇〇〇点と言われているが、正式な目録がないため総点数は不明で、現在一点ごとに収蔵資料基本カードを作成し、名称の確認やサイズ計測、写真撮影等の整理を行っている。これまでに約二〇〇〇点の玩具と約二六〇〇点の関連書籍、雑誌、版画等のカード作成が終了した。

今回は、こけしとその関連資料について紹介する。

現在整理中の玩具

追記（ホームページ公開にあたり，著者の希望により追記します。）
菊野智美（是枝智美）

『　こけしについて

1　起源と発生

現在こけしと呼ばれるものには、伝統こけし・新型こけし・創作こけしの三種類がある。新型こけしは戦後、本来のこけしを模して作られたもので、全国各地の土産物屋等で販売された大量生産品である。創作こけしは近代的な美を追究し工人の個性を表現した、新型こけしの一種である。新型こけしと創作こけしはいわばこけしの類似品であり、これらと区別するために、本来のこけしを伝統こけしと呼ぶようになった。

本来のこけしとは木地師と呼ばれる工人がロクロを挽いて作る木製人形のことで、東北で発生した郷土玩具である。昭和に入りこけしという言葉が一般的に使われるようになるまでは、こげす、きぼこ、こげすんぼこ、きでこ、きなきな坊など、東北各地の方言で呼ばれていた。

起源については諸説あるが、大別すると「信仰起源説」と「玩具起源説」の二つになる。

「信仰起源説」は、東北地方の民間信仰（オシラサマ、山中三助（輔）様など）の木偶がこけしに転化したとする説や、祓具としてのヒトガタがこけしに転化したとする説などであり、「玩具起源説」は、子供の玩具のなかにこけしの祖型となるものがあり、それがこけしに転化したとする説や、木地師が自分たちの子供のために作り与えた人形がこけしだったとする説などである。

発生については、江戸時代後期以後に、宮城の弥治郎、遠刈田、鳴子、作並、福島の土湯でこけし作りが始まったと推定されている。明治に入って温泉での湯治が盛んになるのにともない、こけしも土産物として発達していった。明治二〇年頃には山形の蔵王高湯や肘折でも、遠刈田や鳴子の影響を受けてこけし作りが始まり、明治三〇年代には秋田の木地山で、大正時代初期には津軽地方でこけしが誕生した。

昭和初期まではこけしは子供のおもちゃだった。しかし、昭和七年から同一七年にかけて第一回こけしブームを迎え、このころから子供のおもちゃというよりは大人の観賞品として扱われるようになる。

2　系統の分類

こけしの作りは丸い頭に円筒形の胴をつけただけの単純なものである。しかし、球形の頭や角形に近い頭、まっすぐな胴や中央がくぼんだ胴など、形態にはさまざまな違いがある。

また、頭と胴をつなぐ構造には三通りある。「はめ込み」は頭と胴を別々に作ってつなげたもので、頭が回転するようになっており、まわすと摩擦でキュッキュッと音がする。「差し込み」も頭と胴を別々に作ってつなげたものだが、頭は回転しない。「作り付け」は頭と胴を一本の木から挽いたもので、小寸物（一八センチ以下）はこの様式で作られたものが多い。

描彩は、頭部と胴のどちらにも施される。頭部には前髪や鬢もしくはおかっぱ頭などの髪形や、手絡（てがら）やカセといった飾り模様を描き、眉や目・鼻・口などで表情を表す。胴には菊や桜などの手描きの花模様やロクロ線を描く。

これらの形態や構造、描彩の違いや、工人の生活する土地の風土や文化、生活様式、工人の師弟関係などの違いから、現在こけしは一〇系統に分類されている。

次に各系統の簡単な特徴を紹介する。

土湯系

福島市の土湯温泉を中心に発達した。

構造ははめ込みが主であるが、小寸物には作り付けもある。

頭は比較的小さめで、胴も細い。

頭頂にはロクロで「蛇ノ目模様」が描かれる。これは土湯系に特徴的なもので、大部分は墨で太い輪を描き、その外側に一本から数本の細い輪を描く。また、鬢の上には渦巻状、鱗状等の「カセ」とよばれる赤の飾り紋様が描かれる。胴模様はロクロ線を基本とし、「返しろくろ」と呼ばれる屈折したロクロ線や波線などを組み合わせて、美しい模様を描く。

左から資料番号 1, 7, 20, 28, 40

左から資料番号 63, 55, 56, 83, 75

弥治郎系

宮城県白石市福岡八宮字弥治郎を中心に発達した。

構造ははめ込み、差し込みの両方があり、小寸物には作り付けもある。胴に比べて頭が大きい。胴の形態は変化に富み、六寸（一八センチ）以下の作り付けには胴の中ほどがくびれたもの（弥治郎特有の形態で、ペッケという）がある。

頭には赤や紫など多色使いのロクロ模様を描き、ベレー帽を思わせる。

胴模様はロクロ線だけで描かれたものや、ロクロ線と手描きの花模様を組み合わせたもの等があるが、ロクロ線は土湯系の線状のものと違い、帯状のものを組み合わせている。

遠刈田系

宮城県刈田郡蔵王町遠刈田新地を中心に発達した。

構造は以前ははめ込みであったが、現在は差し込みになっている。

頭が胴に比べて大きく、頭部には放射状の手絡模様や鬢飾りを描く。

胴には「重ね菊」や「旭菊」などの菊花のほか、桜や梅、木目などが象徴的に描かれている。遠刈田系のこけしは描彩の美しさから、すべてのこけし中最も華麗といわれている。

左から資料番号 85, 89, 109, 92, 116, 334
334 はねまりこである。

鳴子系

宮城県玉造郡の鳴子温泉を中心に発達した。

構造ははめ込みで、肩に段があり、太めの胴の中央はややへこんでいて安定感がある。

頭頂に描かれる水引きは京都の御所人形に由来する。祝い物として用

いる人形の額には、紅色で水引手(頭髪を結んだ水引を模様化したもの)が描かれる。これが堤人形(宮城県)や花巻人形(岩手県)、相良人形(山形県)などに伝わり、やがてこけしの頭部にも描かれるようになった。

大正から昭和二〇年までの間、鳴子では胴を黄色に塗りつぶすのが一般的だったが、戦後は白木地が多くなった。

胴には菊や楓を描いたものが多い。

左から資料番号 133, 125, 331, 131, 150, 143
331 はねまりこである。

左から資料番号 159, 162, 169, 170, 176

山形作並系

山形県山形市、宮城県仙台市青葉区作並温泉を中心に発達した。

構造は差し込みで胴が極端に細く、立たないこけしとして知られていた。これは幼児が手に握って遊んだためで、立つ必要がなかったからである。

胴には梅や桜模様を描くが、作並こけしにはカニの横這いのような菊花模様を描く。

蔵王高湯系

山形県山形市蔵王温泉（旧蔵王高湯）を中心に発達した。遠刈田系から分化して発生した比較的新しい系統で、蔵王系ということもある。

構造は以前ははめ込みであったが、現在は差し込みにかわっている。

様式は遠刈田系を基本とするが、やや太めの胴は鳴子系の影響を受けており、頭部に土湯系の蛇ノ目模様の変形を描いたり、胴を黄色に染めるなどして、しだいに独自の作風を確立させていった。

左から資料番号 190, 191, 326, 195, 213, 210
326 はえじこである。

左から資料番号 219, 222, 226, 230, 228

肘折系

山形県最上郡大蔵村肘折温泉が発祥地である。

同地で生まれた柿崎伝蔵が鳴子で修行した後、明治一〇年頃帰郷して開業。その弟子井上藤五郎が遠刈田に修行に行き、明治二〇年頃遠刈田式の技法を伝えた。こうして鳴子系と遠刈田系のこけしが融合し、初期の肘折系こけしが誕生した。その後も鳴子系、遠刈田系双方の技術が流

入し、鳴子系の形態（肩に段のある太めの胴）に、遠刈田式の華麗な描彩を施すという独自の作風が完成した。口角のあがったくちもとは、肘折独自の表情を醸しだしている。

構造は古いものははめ込みだが、新しいものは差し込みになっている。

木地山系

秋田県雄勝郡皆瀬村木地山を中心に、鳴子系から分化して発生した系統である。

構造は作り付けが基本で、らっきょう形の頭にずんぐりとした胴を持つ。胴模様は古くは鳴子式の簡単な菊模様が描かれていたが、現在は梅花模様の前垂れを描くことが多い。この模様は小椋久四郎が木地山地方の娘の前垂れ姿を模したのが始まりで、今では木地山系の特徴の一つとなっている。

左から資料番号 232, 242, 236, 250, 253

南部系

岩手県花巻市周辺の旧南部領一帯で発生した。花巻市、盛岡市、和賀郡和賀町横川目などが主な産地である。

旧南部領一帯には、頭部が胴にゆるくはめ込まれているために、振ると頭がクラクラゆれる「キナキナ」という玩具が分布している。これは、幼児が握って遊ぶこともできるおしゃぶりの一種で、一〇センチ前後の無彩色のものである。

南部系こけしはこのキナキナから発達したもので、頭がゆれ動くはめ込み式のものが多い。描彩はキナキナ同様無彩色のものもあれば、ロクロ線を入れたもの、手描き模様を描いたものなどさまざまである。

津軽系

青森県黒石市温湯温泉、同県南津軽郡大鰐温泉、弘前市などの津軽地方一帯で発達した系統で、温湯系ということもある。大正四、五年頃盛秀太郎によって始められた系統で、全系統中最も新しい。

構造は作り付けが基本で、小さめの頭にオカッパ頭を描いたものが多く、胴模様は簡単なロクロ線を描いたもの、ねぶた絵の影響を受けたもの、「アイヌ模様」といわれる独特の模様を描いたものなどがある。

津軽系は木地と描彩が別人の場合が多く、木地を挽いた工人の名義でまわっているこけしがあるので、注意が必要である。

左から資料番号 258, 256, 257, 254, 262

左から資料番号 268, 271, 274, 275, 277

3　コレクションのこけしについて

（1）概要

川邊コレクションのこけしの全容については、川邊氏が書いたと思われる手書きの目録のコピーによって知ることができる（表1）。この目録は東北六県の各県ごとと東北地方以外に分けて、こけし名・作者名・各工人ごとの本数・備考等が書かれており、えぢこ五点を含む総点数は三五〇点となっている。

今回当館が寄贈を受けたのは三三四点で、内訳は伝統こけし三一五点、新型こけし九点、えぢこ六点、ねまりこ四点となっている。これらの中には目録に記されていないものが一一点含まれる。

これらを十系統の分類に従ってまとめたのが表2である。どの系統にも当てはまらないものや、工人名が不明なものは「そのほか」とした。

また、えぢこやねまりこなどの木地玩具は表末に掲載した。

「えぢこ」とはこけし同様東北地方特有の玩具で、農繁期に蔡籠に入れられた子供の様子を人形化したものであり、「ねまりこ」とは座った子という意味の方言で、えぢこよりもやや背の高い裾広がりな木地玩具に対する鳴子系の古い呼称である。

保存状態は比較的良いほうと言えるだろう。ただし、黄色や緑など染料によっては褪色が進んでいるものがあり、頭部に割れが生じたものや虫食のあるものなど、五点に大きな傷がある。

また、どのこけしにも胴の底もしくは背面に、墨やペンなどで産地や工人名が書込まれている。胴の底に工人が署名するようになったのは戦後のことで、それ以前は収集家が記入することが多く、これらも川邊氏が書込んだものと思われる。しかし、複数の筆致があることから、川邊氏以外の誰か（例えば川邊氏が購入する以前の所有者など）が記入したものもあると思われる。また、県名は後から書き加えられたものが多く、そのほとんどが同じ筆致であることから、これは川邊氏自身が書込んだものと推定される。

（2）各こけしから見る工人及びその特徴（数字は資料番号を表す）

伝統こけしの工人については、『古計志加々美』[1]のような写真集や、工人の師弟関係・戸籍・鑑別法などについてかかれた『こけし辞典』（鹿間時夫・中屋惣舜編、東京堂出版、一九七一年。以下『辞典』と記す）など、関連書籍が多数出版されている。

そのため、形態や描彩の違いからある程度そのこけしの製作年代を絞り込んだり、木地作りと描彩が別人によるものや、他人名義で販売されたこけしの工人を特定することも可能である。

コレクション中のこけしにも、書込まれた漢字が誤っていると思われるものや、書込みのある工人とは別人による描彩、または他人名義と思われるものがある。しかし、こけしについては専門外であるため、今回は一本一本について書込みの真偽を判断することは控えた。ただし、書込まれた工人とはあきらかに作風の異なるこけしや、工人の年齢が記入されていて製作年が特定できるもの等について次に述べる。

5・6　工人名は佐藤米吉となっているが、作風が佐久間米吉に酷似していること、土湯系の工人に佐藤米吉という人物が見当たらないことなどから、佐久間米吉の作品と思われる。

7　佐久間虎吉は明治二四年生まれの初代と大正三年生まれの二代

がいるが、二代目襲名が昭和三八年であること、こけしの収集はほとんど戦前であったことなどから、初代虎吉と推測される。

22～24 阿部治助は明治一八年生まれ（土湯系）と明治三六年生まれ（そのほか）の二人がいるが、本作品が三本とも土湯系の作風であることから、一八年生まれの治助と思われる。

38・39 小幡福松名義のこけしは、木地、描彩ともに複数の工人が関わっている。この二本の描彩に関しては、上下瞼がほぼ平行であること、前髪が小さいこと、鬢が細く二筆であることなどから、弟の徳松による描彩と思われる。

66・67 蔦文男は大正一〇年生まれと昭和一九年生まれがいるが、作風が大正生まれのほうに近いこと、昭和一九年生まれは描彩を始めたのが昭和三三年頃からであることなどから、大正生まれの文男と思われる。なお、こちらは昭和一九年二月に戦死している。

74 書込みは「佐藤栄治」となっているが、『辞典』の栄治・喜一の鑑別法に従うと、鼻や鬢の描彩は息子喜一の特徴を満たしているようである。

80 変わり型の子守こけしである。左肩に子供の顔があり、母親が優しく見守っている。

88 佐藤松之進は明治八年生まれ。「六十六才」と書込みがあるので、昭和一五、六年頃の作と思われる。『辞典』によると「昭和一二年以後は息子たちの木地に描彩だけしていた」とあるので、本品も描彩のみ松之進によるものかもしれない。また、鉛筆で1.70と書込まれていることから、一円七〇銭で購入したものと思われる。

109 佐藤文助は明治三四年生まれ。「四十」と書き込まれているのが年齢のことだとすると、昭和一五年頃の作である。

112 佐藤護は明治三六年生まれ。「六十五才」と書き込まれていることから、昭和四二、三年頃の作である。コレクションの中では珍しく戦後の作品である。

121 底のシールは朱色に白で「木地挽物・漆器玩具　青根木工組合特製」とかかれている。『辞典』によると、青根木工組合は昭和七年に創立されたが、三年後には運行不可能となり、昭和一四年に解散しているので、このこけしは昭和七年から同一四年までの間に製作されたものと思われる。

130～132 目録、書込みとも「高橋武雄」となっているが、弟高橋正吾氏のご指摘により、「高橋武男」が正しい。

135 鉛筆で40と記されており、四〇銭で購入したものと思われる。

143・144 目録では「小松伍平」となっているが、『辞典』や『幻想のこけし』に「小松五平」の記述があること、144の底に「小松五平」と書き込まれていることなどから、「小松伍平」は「小松五平」の誤りと思われる。

183・184 産地の書込みはないが、『辞典』より山形県米沢市の工人であることがわかる。どちらも胴に松竹梅を描いている。

189 岡崎長次郎は明治一一年生まれ。「六十六才」の書込みがあることから昭和一八、九年頃の作である。

209～212 「秋山喜一郎」と「秋山慶一郎」は同一人物である。慶一郎が昭和一六年頃まで喜一郎の名前を使っていた。

210は三十五・二センチの特大サイズで、底には「東京こけし会」「山形　鶴岡　秋山慶一郎」と書かれており、東京こけし会のメン

バーと思われる「はぎ原素石」「天江富彌」「石井康策」「牧野玩太郎」「稲垣武雄」「川口貫一郎」「鈴木凡太郎」の署名がある。

229・230 佐藤文六は明治一三年生まれと明治三二年生まれの二人がいるが、作風から明治一三年生まれの文六と思われる。

271・272 『辞典』によると、村井福太郎のこけしは描彩が別人による場合が多く、複数の工人が関わっている。瞳を白く残している点、横菊の胴模様が描かれている点などは、長谷川辰雄描彩の特徴をみたしているが、判然としない。

273・274 『辞典』によると、佐々木金次郎は木地のみで全く描彩をせず、長谷川辰雄が描彩したものが多い。この二本も辰雄描彩のこけしに似ているようである。

279 書込みは「伊藤儀一郎」となっているが、本作品は儀一郎こけしの特徴である胴の余白が少なく、どちらかというと弟常治の描彩に近いようである。

293・294 『辞典』には「小田島邦太郎」の記述がある。書込みは「小田島国太郎」となっているが、「邦太郎」の誤りか。仮に「邦太郎」こけしだとすると、「小田島邦太郎」は名義だけで、実際には「佐藤丑蔵」「菅原庄七」「佐藤末吉」等が製作していた。

306 作風が「伊豆定雄」のものと全く違う。胴模様は木地山系の菊模様に近く、書込みが間違っているのではないかと思われる。

307・308 二本とも伊豆定雄の作風とは異なっている。306同様胴模様は木地山系の菊模様に近いが、顔の描彩は三本とも違っている。

309・310 当時の新型こけしである。軽部留治は昭和一五年に没しているので、それ以前の作である。

311 これも新型こけしである。『辞典』によると、船山嘉作は描彩だけで木地挽きは別人が行っていたとあるので、本品も描彩のみと思われる。

312～314 『辞典』では小椋留三は描彩をしない工人となっている。この三本も木地挽きのみ小椋留三によるものだろう。

315 本来こけしの存在しない佐賀の作品である。観光地などで販売された新型こけしだろう。

317 工人不明。産地は「山形米沢」となっており、作風は小林吉太郎（米沢こけし）のような作並系に近い。

318 工人不明。湯沢の工人には鈴木国蔵、松江謙太郎、鈴木幸太郎などがいるが、本品は松江謙太郎の作風に近いようである。

320 『辞典』には白石市の「八代鉄園」という新型こけしの工人について記述がある。本資料は目録では「八城鉄園」となっているが、同一人物か。

321 目録には「本田鶴松か」と書かれているが、本田鶴松は弥治郎系の工人である。底の書込みが「宮城小原」となっており、小原が宮城県白石市小原であること、321の描彩が320に似ていることなどから、工人は320同様八代鉄園ではないかと推測される。

322・323 顔の描彩が酷似していることから同一人物によるものと思われる。どちらも頭部は髷付きで、胴には布をまいて前掛けや着物を表現している。新型こけしであろう。

324 髷付きの新型こけしであろう。

二　こけし入手に関する資料

川邊コレクションのほとんどのこけしは、いつ・どこで・どのようにして入手したのか不明である。ただし、全国の玩具店や収集仲間から送られた新着玩具案内目録、頒布会お知らせ等のハガキや手紙が多数残されており、印がついているものも多い。これらと照合することで、玩具の入手時期や金額等が推測できるものもある。

入手の経緯について次に紹介する（数字は表2の資料番号を表す）。

1　受入先判明こけし

寄贈された時期については不明だが、川邊コレクションの目録から、九点のこけしについては旧蔵者から川邊氏に寄贈されたものであることがわかる。

川口貫一郎氏旧蔵こけし

川口貫一郎氏は東京こけし会のメンバーで、機関誌『こけし』[3]を編集したほか、限定非売のこけし関連の本を多数執筆している。

目録に「川口貫一郎贈」と記入されたこけしに該当するのは、64（鶴作蔵　底に書き込まれた番号は633）・280・281（小椋千代五郎　二本とも底に書き込まれた番号は940）の三本と、236～240（柴田鉄造）のうちいずれか一本の計四点である。

この他に川口氏から三五点のこけしを購入したと推測できる手紙が残っている（後述）。

祖父江梧樓氏旧蔵こけし

祖父江氏から寄贈されたこけしは60（鎌田文市　底に書き込まれた番号は758）・105（佐藤円吉　底に書き込まれた番号は950）の二点である。これら二本の他、東京や京都の郷土玩具数点も寄贈を受けているが、祖父江氏の経歴については不明である。

木村弦三氏旧蔵こけし

木村氏から寄贈されたこけしは247・248（樋渡治一　二点とも底に書き込まれた番号は544）のうちの一点と、271・272（村井福太郎）のうちの一点、266・267・269・270（盛秀太郎）のうちの一点の計三点である。

木村氏は川邊氏同様郷土玩具を収集していた弘前市の方で、こけしの他にも、東北地方の玩具を中心に多数寄贈を受けている。

2　木形子研究会頒布こけし

昭和一一年一二月に橘文策氏、米浪庄弍氏ら八人で結成された研究会で、昭和一二年一月には大阪高島屋でこけし展覧会を開催、その後同高島屋の協力を得て、昭和一二年七月から同一二月までに六回の頒布会を主催している。このとき頒布されたこけしは二〇〇口限定となっており、毎回頒布こけしの解説（写真付）やこけしにまつわる話などが掲載された『木形子通信』[4]というリーフレットが添えられた。

第五回と第六回の頒布予定時期は不明だが、第五回は一一月、第六回は一二月に頒布されたと思われる。

第一回　鳴子系　　高橋武蔵　　尺一寸、八寸、五寸、ネマリコ

（申込期限　昭和一二年七月末日）

127・128・129はそれぞれ右のサイズに近く、331も加えた四点は写真に酷似している。

第二回　遠刈田系　菅原庄七　　尺五寸、ネマリコ一対

（昭和一二年八月下旬　頒布予定）

寄贈されたこけしの中には尺五寸に該当するものはない。

しかし、333・334のねまりこは写真に酷似している。

第三回　木地山系　小椋久太郎　尺、八寸、六寸

（昭和一二年九月中旬　頒布予定）

234・235のサイズがそれぞれ尺、八寸に近い。

六寸に該当するものはない。

第四回　土湯系　西山徳二　八寸、六寸

遠刈田系　斎藤源吉　八寸、六寸、四寸

（昭和一二年一〇月下旬　頒布予定）

コレクション中の徳二の作品はすべて書込みが「徳治」になっている。17・18は徳二を徳治に訂正してあり、ロクロ線は赤、紫、緑の三色である。19・20は徳治だけが行書体で書かれていて、ロクロ線は赤、紫、黒の三色で、波線が緑である。17・18か19・20のセットをこのときに購入したと思われるが、写真が白黒であるためロクロ線の色を確認できず、どちらのセットを購入したかは不明である。

斎藤源吉は『木形子通信』第四号（一九三七年九月）では遠刈田系に分類されているが、ここでは『辞典』や『幻想のこけし』[5]に従い、蔵王高湯系に分類した。

191は八寸に近く、193は四寸に近いようだが、192は六寸よりもやや大きめである。また、193は写真と比べると、胴の形態や描彩が少し異なっている。

第五回　遠刈田系　佐藤秀一　九寸三様

113・114・115は三本とも二七センチ前後で、胴模様も写真とほぼ同じである。

第六回　花巻系　佐々木輿始郎　尺、八寸

温湯系　盛秀太郎　七寸、五寸

佐々木輿始郎は261・262がそれぞれ右のサイズに近く、写真に似ている。

盛秀太郎は270が五寸の写真に近いが、大きさが一二・三センチで約一寸サイズが違う。また、七寸に該当する資料はない。

3　雑誌『木形子』にともなう頒布こけし

『木形子通信』に続いて、木形子研究会より発行された雑誌『木形子』[6]には、「頒布こけし御通知」と題したB5版の用紙が折り込まれていた。コレクション中にはこの用紙が第八回まであるが、第四回は欠如している。第五回、第六回、第八回の頒布予定時期は記載されていなかったため不明である。

金額はすべて送料込みである。

第一回　秋田県本荘町　河村清太郎　四寸・六寸

宮城県弥治郎　新山栄五郎　五寸・七寸

一組…二作者四本　一円六〇銭

（昭和一三年四月末　頒布予定）

河村清太郎の六寸に近いのは151・152の二点であるが、これは別で入手したものと思われ(後述)、四寸に該当するものはない。

新山栄五郎は51・52の二点が五寸に近く、50は七寸に近い。

第二回　花巻　照井音治　一組三本（尺、八寸、六寸）　二円

（昭和一三年六月早々　頒布予定）

258はほぼ一尺だが、259・260は八寸、六寸よりやや大きい。

第三回　遠刈田　小林善作　一組二本（八寸、六寸）　一円

（昭和一三年八月上旬　頒布予定）

226・227が該当するが、227はやや大きめである。

第五回　十和田湖　高瀬善治　一組二本（尺、六寸）　一円五〇銭

154が尺に該当する。六寸に近いのは155・156の二点である。

第六回　遠野　常川新太郎

一組六寸、四寸、二寸強（無彩ネヅリコ）　一円

『辞典』によると新太郎名義の描彩はすべて弟雄三郎が行っている。コレクション中には常川雄二郎名義のこけしが二点（295六寸、296四寸）あるが、常川家に雄二郎という人物が見当たらず、作風が雄三郎のこけしに似ていることから、雄三郎の間違いだろう。また、作者不明の297（底の書込は「岩手遠野」）は作風が295・296に酷似している。

ネヅリコとはおそらくねまりこのことで、該当する資料はない。

頒布予定時期は不明だが、第七回頒布こけし御通知に「第六回頒布の遠野、常川新太郎の作は延着してゐますが、本月中にはお届け出來る筈です。」とある。その他の文面より、本月中とはおそらく昭和一三年一二月のことと思われる。

第七回　鳴子　秋山忠　一組三本（尺、七寸、五寸）　一円五〇銭

（昭和一三年一二月下旬　頒布予定）

尺は138、五寸は139が近いが、七寸に該当するものはない。

第八回　宮城県遠刈田新地　佐藤廣喜

一組三本（九寸、七寸、五寸）　一円五〇銭

93・94・95はそれぞれ右のサイズに近い。

4　後藤善松こけし頒布

鳴子の後藤善松の一尺こけしを一円三〇銭（送料共）で頒布する旨の手紙である。差出人は川口貫一郎氏で、昭和一四年五月付になっている。

後藤善松こけしは142（二九センチ）一本のみである。

5　雑誌『鴻』頒布こけし

こけし専門雑誌『鴻』で、一三回にわたって頒布されたこけしである。毎回、寸法、本数、模様の選択は自由であった。

コレクション中、一三点のこけしの底に「鴻」の印が押されており、第一回から第四回までの頒布こけしに該当している。

第一回（一五年七月）遠刈田　我妻市助　二〇歳

尺、八寸、六寸、四寸、一寸、二種類の変わり模様が頒布されたうちの尺（一円三〇銭）、八寸（八〇銭）、六寸（五〇銭）を購入したと思われる。

102・103・104がそれぞれ右のサイズと一致する。

第二回（一五年八月）遠刈田　佐藤好秋　三五歳

尺、八寸、六寸、五寸、四寸、二寸、一寸、十数種類の変わり模様が頒布されたうちの尺（一円三〇銭）、八寸（八〇銭）、五寸（四〇銭）、四寸（三〇銭）を購入したと思われる。

97・98・99・100がそれぞれ右のサイズと一致する。

第三回（一五年九月）鳴子　伊藤松三郎　四七歳

尺、八寸、六寸、四寸、一寸、豆エヂコ、エヂコ菓子鉢特製、

並製が頒布されたうちの尺（一円三〇銭）、六寸（四〇銭）、豆エヂコ（二〇銭）を購入したと思われる。

140・141・325がそれぞれ右の三点と一致する。

第四回（一五年一〇月）遠刈田 佐藤廣喜 五二歳

一尺五寸、一尺二寸、一尺、八寸、六寸、四寸、一寸、

型変わり三種、模様変わり六種頒布されたうちの、

尺（一円三〇銭）、八寸（八〇銭）、六寸（五〇銭）を購入したと思われる。

90・91・92がそれぞれ右のサイズと一致する。

6 吾八入札会落札こけし

コレクションの図書には、東京の古書籍、古美術の店吾八が発行した月刊誌『これくしよん』[8]が多数含まれている。『これくしよん』には、ときどきこけしの特集や入札案内が掲載されることがあった。昭和一五年一〇月に発行された『これくしよん　四二號　藏書票の號』には、古作こけし約五〇点の入札案内が掲載され、このうち一二工人一四点のこけしに川邊氏がつけたと思われる印が付いている。

また、このときの入札結果を知らせたと思われる一〇月六日付（年代不明）の手紙があり、内容から川邊氏が入札していた数点のこけしのうち、「盛秀太郎（アイヌモヨウ）」一点を二円五〇銭で落札したことが分かる。『これくしよん　四二號　藏書票の號』に掲載された写真と酷似していること、サイズが落札したこけしの七寸七分と近いことから、268がこのときの落札品と思われる。

7 仙台きぼこ會頒布こけし

仙台きぼこ會は鹿間時夫氏・鈴木清氏等が結成した会である。

第一回と第三回を除くきぼこ頒布會の案内が残っている。

第二回きぼこ頒布會（ハガキ・消印昭和一五年八月）

遠刈田 作田栄利 四三歳

三本一組（尺・八寸・六寸）三円五〇銭（送料共）

ハガキの表に「8/12送金」と書込みがあることから、106・107・108はこのときに購入したことがわかる。

第四回きぼこ頒布會（手紙・消印不明）

山形 日下源三郎

三本一組（尺・八寸・六寸）三円（送料共）

コレクション中の源三郎こけしは四本あり、179には値札のようなシールが一部残っている。176・177・178のサイズは右にほぼ一致している。手紙に書込みはない。

第五回きぼこ頒布會（手紙・消印昭和一六年一月二九日）

福島県飯坂町湯沢（鯖湖）

渡辺喜平の木地に母きん（六一歳）の描彩

こけし二本一組（八寸・七寸）　円三〇銭

第四回と同様書込みはないが、40・41のサイズはほぼ一致する。

なお、40には「フクシマ熱海 渡辺キン 六十一才」、41には「渡辺キン 六十一才 熱海 渡辺求 フクシマ」と書込まれているが、きんは鯖湖の土湯系工人であり、渡辺求は熱海の弥治郎系工人であることから、40の「熱海」、41の「熱海　渡辺求」はおそらく書込み間違いである。

8　東北こけしの旅

コレクションの図書のなかに、虫損のはげしい和綴本がある。これが包んであった新聞紙には「東北こけしの旅記録」と記されていた。内容から、川邊氏が昭和一六年四月一二日に山形県温海温泉、同一三日に秋田県本荘町を訪れた際に、交流のあった四人のこけし工人と六人の玩具収集家に、絵や短歌を書いてもらったものであることがわかる。

213の阿部常吉（温海温泉）と、151の河村清太郎（本荘町）はこのときの絵とそっくりである。また、149・150・151・152の胴の底に書込まれた「羽後本荘　河村清太郎作」という文字がすべて同じで、なおかつ和綴本に書かれた「河村清太郎」も同じ字であることから、この四点は本人が署名したものと思われる。

また、二頁目には「つぶらなる／瞳可愛いや／温海こけし／荘内おぼこの／姿にも／似て／昭和十六年四月／温海にて／富彌生」と書かれている。「富彌」とはおそらく、こけし最初の専門書『こけし這子の話』[9]の著者天江富彌であろう。天江のこけしコレクションは第一級のもので、こけしコレクションの原典といわれている。

9　川口貫一郎氏重複品売却こけし

コレクション中には、川口氏が収集したこけしのうち、重複した工人の作品を販売するための手紙（八月二五日付、年代不明）があり、こけし頒価目録と題して約二〇〇点にのぼるこけしの産地、工人名、サイズ、価格が記されている。この目録には、川邊氏がつけたと思われる紫色のチェックが四七名分入っている。

さらに、購入希望の問合せに対する返事と思われる手紙があり（年月日不明）、一三名三五点のこけし産地、工人名、サイズ、価格が記されている。金額は三五点合計で一二円七五銭となっており、「右よろしければ送料二三十銭別にお願ひしたいと思います。」と書かれている。

該当すると思われるこけしには、表2の備考欄に「川口」と記した。

10　文園堂　おもちや筥

文園堂は福岡市橋口町にあった古書店で、昭和九年から玩具やこけしも販売するようになり、同年から昭和一七年にかけては、全国の郷土玩具やこけし等を販売するための目録「おもちや筥」を第一二号まで発行した。このうち第三号（昭和一一年三月）と第五号（昭和一四年六月）にこけしが掲載され、第五号には川邊氏がつけたと思われる印がついている。しかし、第五号には工人名が掲載されておらず、該当資料を特定できなかった。第一二号（昭和一七年一二月）はこけし特輯号で、旧作こけし四点、新作こけし七点に丸印がついており、このうち新作こけし分はコレクション中にサイズの近いこけしがある。

中山平　大沼岩蔵　七寸　一円五〇銭

125は二三・五センチでやや大きめのサイズである。

酒田　白畑幸作　墨絵　六寸　六五銭

301はサイズがほぼ一致し、描彩は墨の濃淡だけである。

鶴岡　秋山慶一郎　四寸　四〇銭

212はサイズがやや小さめである。「おもちや筥一二」には印こそついていないものの、「秋山慶一郎　三寸五分　三〇銭」も掲載されており、四寸が品切れで三寸五分を購入したとも考えられる。

山形　長岡幸吉　八寸　一円二〇銭
180のサイズがほぼ一致している。
上ノ山　木村吉太郎　八寸　一円五〇銭
199のサイズが近い。
山寺　石山三四郎　尺　一円六〇銭
203のサイズがほぼ一致している。
蔵王高湯　斎藤松治　尺一　三円五〇銭（二円以上税込）
サイズが近いのは190である。胴底に「六十七才」の書込みがあり、明治一〇年生まれの工人であることから、昭和一八年頃の作と思われる。「おもちや筥一二」は消印が昭和一七年一二月一三日なので、このとき購入したかどうか微妙である。

11　番号記入こけし

コレクションのこけしには、底に番号が書込まれたものが五五点ある。番号は一番小さなものが三八九、一番大きなものが一二〇六で連番にはなっておらず、同じ番号が二点以上ある場合もある。

川口氏の重複こけしのように、もともと誰かが収集していたものを譲り受けたと考えられるが、目録から受入先が判明した60・64・105・280・281の五点（前述）を除いては、元の持ち主は不明である。

該当するこけしは表2の書込等の欄に数字を、備考欄に「番号」を記した。

むすび

川邊氏はよく東北に旅行されていたそうである。しかし、鹿児島から遠く離れた東北のこけしを入手するためには、頒布会や玩具店の通信販売を利用することも多かっただろう。

今回入手方法が特定できたのは、目録に受入先の記録があり、こけしを特定することができた五点と、落札通知のある盛秀太郎一点、送金記録のある作田栄利三点の計九点だけである。しかし、こけし頒布会の案内通知や玩具店からの販売目録等から、約半数のこけしについて購入先を推測することができた。残りの半数についても、底の書込みの文字や、一部残っているシールのあと（値札と思われる）を詳細に比較することで、何らかの発見が期待される。今後の課題としたい。

また、「二　こけし入手に関する資料」のほとんどが昭和一二年以降ということからもわかるように、コレクションのこけしは昭和一〇年代に作られたものが多いようである。ただし、底に番号が記入されたこけしに関しては、『辞典』や『古計志加々美』[10]などの鑑別法や写真と比較した結果、昭和一〇年以前の作品が多少含まれているように思われる。

第一回こけしブームは昭和一五、六年をピークとしており、川邊氏のこけし収集もほぼこの時期と一致しているといっていいだろう。

今回は紹介できなかったが、コレクションの図書類にはこけしに関する専門書や雑誌類が一五〇冊ほど含まれている。虫損があるなど状態の良いものばかりとは言えないが、終戦（昭和二〇年八月）以前のものは、こけしに関する貴重な文献がかなりそろっている。

また、そのほかにも昭和一〇年に木形子洞から発行された「木形子作者人氣番附」や、昭和一二年に木形子研究会から発行された「木形子人